

エディトリアル

川崎市立多摩病院救急災害医療センター 副センター長 野村 悠

昨年に続き、『疾患今昔物語』の第2弾として消化器編をお届けする。

医師になり十年も経つと、学生時代に学んだ疾患概念や病名が変化したことに気づく。若手時代に指導を受けた(言い聞かされた?)ことは頭と体にしみついており、エビデンスの有無にかかわらず自分の診療スタイルや思考の型となっている。この型は、医師になった年代や指導医の年代で異なり、医師同士のジェネレーションギャップを生み出す一因となる。

本特集では、ここ数年から数十年で疾患概念や治療方針が変わりジェネレーションギャップの種となり得そうなものを取り上げた。その目的は「疾患アップデート」ではなく「ジェネレーションギャップを埋めること」である。取り上げた疾患の今昔の歴史を紐解くことで、若手はベテランの思考や背景を理解し、ベテランは若手の持つ新しい知識を取り込み、相互の世代背景を知る機会としていただきたい。

山本博徳論文では、消化器内視鏡デバイスの歴史とダブルバルーン内視鏡や内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)の開発経緯を開発者自らご紹介いただいた。ESDの粘膜膨隆形成のために関節注射で使用していたヒアルロン酸ナトリウム製剤を思いつくなど、自治医科大学卒業生のキャリアならではのアイデアである。

大澤博之論文では、酸関連疾患とPPIをはじめとした酸分泌抑制剤との関係について深く解説いただいた。PPIを処方する機会は増えているが、筆者はその奥の深さを知り、浅い知識を恥じるばかりである。

佐藤貴一論文では、ヘリコバクター・ピロリについてご紹介いただいた。全例除菌対象となるのか疑問を抱いたり、研修医時代には特発性血小板減少性紫斑病(ITP)患者のピロリ除菌を不思議に思うこともあったが、頭が整理された。

笹沼英紀論文では、腹腔鏡下胆嚢摘出術の歴史について紐解いていただいた。保険適用となるまでには大変なご苦労があったことだろう。適応疾患が拡大され、ロボット支援手術が期待されるなど、まだまだ先のある術式だという印象を抱いた。

福井太郎・野田弘志論文では鼠径部ヘルニアの過去、現在、未来が分かりやすく整理されている。虫垂炎とともに、若手外科医にとっての登竜門というイメージだが、術式の変遷だけでなく、分類や教育、他領域との関連にも言及していただき、「深い」疾患であると知った。

山口博紀論文では、抗がん薬の開発経緯が分かりやすく整理され、物語として読みやすい。抗がん薬が抗生物質や毒ガスから生まれたことを知り、開発者の大変なご苦労を思いつつ、戦争で発展する医療技術に複雑な思いを抱く。抗がん薬の種類が増え、理解が追い付かなかったが、本稿で大筋を整理していただき、俯瞰的に捉えることができそうである。

今回も執筆いただいた論文の全てにおいて、各疾患や技術の歴史的背景を紐解いていただき、大変興味深く学びが大きい特集となった。全ての執筆者に深謝したい。「昔はこうだったんだよ〜」「今はこうなんですよ〜」とベテラン医師と若手医師が語らいながら酒の肴にでもしていただけたら本望である。